

【自著紹介】 落合貞夫『高松が舞台になった村上春樹「海辺のカフカ」』

(ボーダーインク 2025 年 6 月)



私は、県外の大学で5年間過ごした以外は香川県高松市で暮らしている。その関係から、高松を主要な舞台にした『海辺のカフカ』については、関心と興味を抱き続けてきた。初めて作品を読んだとき、意識を失ったカフカ少年が倒れていた場所は、「石清尾八幡神社」の森の中に違いないと確信した。また、「入り口の石」があった小さな祠は「蜂穴神社」ではないかと想像した。それ以後も、なぜ高松が舞台になったのだろうか？ という疑問と、カフカ少年が行った甲村記念図書館、うどん屋、ビジネスホテルなどは、いったいどこだろう？ という関心がいつも頭の片隅にあった。

高松市内を渉猟して『海辺のカフカ』の舞台を詳細に調査したのは、2003 年 3 月まで香川大学教育学部に在職されていた高橋龍夫氏（現・上海外国語大学教授）である。その成果は、『我々の星ハルキ・ムラカミ文学 — 惑星的思考と日本的思考』（彩流社、2022 年）の第 10 章「『海辺のカフカ』を歩く — 舞台としての香川・高松」に詳しく記述されている。

さっそく私は高橋氏の論考にしたがって、カフカ少年のたどった高松市内の足跡を実際に歩いてみた。そして高橋氏の推定に確信をもった。同時に、高松と『海辺のカフカ』の関係について、網羅的に取り扱った本を書く必要性を強く感じた。

そんなとき、私に高松市の菊池寛記念館から文芸講座の講師依頼があった。私は迷うことなく、「高松が舞台になった『海辺のカフカ』」という演題で引き受けることにした。高松と『海辺のカフカ』の関係について、私と同様な関心や興味を抱いている市民は多くいるに違いないと思ったからである。拙著は、そのときの講演原稿に、大幅な加筆をして一冊にまとめたものである。執筆に当たって特に力点を置いたのは、第 9 章「なぜ高松へ行くのか」と、第 10 章「高松のどこが出てくるか」である。紙数の関係から、主にこの二つの章について紹介したい。

【第 9 章 なぜ高松へ行くのか】

村上春樹は『海辺のカフカ』を書く以前に何回か高松を訪れている。たとえば、『辺境・近境』（1998 年）の中の「讃岐・超ディーブうどん紀行」は、香川・高松の穏やかな風土を生き生きと伝えている。「村上春樹ロング・インタビュー『海辺のカフカ』を語る」（『文学界』2003 年

4月号)の中でも、村上は香川について、「一番腰を据えやすいという感じがするんですよ。受け入れてくれそうな感じがするんだなあ」(11 頁)とか、「なんとなく懐かしいという感じがするんです」(同前)と述べている。これらの言葉から、香川がカフカ少年を受け入れ、再生させるにふさわしい土地柄であると村上が感じていたことがわかる。作品の中でも、高松にやってきたカフカ少年が電車の窓に顔をつけて、「そういう風景を眺めていると、僕の心にもう一度あたたかく穏やかな思いが戻ってくる。大丈夫だ、僕は大きく深呼吸してから自分にそう言いきかせる」(文庫版上 71 頁)という場面があり、村上と同様の印象を語らせている。

高松在住の者にとって、地域の光景は見慣れていて、とりわけ特異なものとは感じていないのだが、村上は香川について、「気候も穏やかだし人あたりも穏やかだし、行ってみると、空気とか光の加減とか風景の色とか、そういうものがちょっと違うんです、ほかの所とは」(同前)と述べている。村上は、香川に何か特別なものを感じたに違いない。

なお、高松が舞台になった要因については、上田秋成の『雨月物語』との関係や、四国の山間部の出身である大江健三郎との関係が指摘されてきた。この両者が舞台設定の大きな要因になったことは、村上の上田秋成や大江健三郎との関係から言って疑いようもない。ただ、先述したように、高松が舞台になった主な要因は、カフカ少年を受け入れ、再生するにふさわしい風土にあったと考えられるのである。

【第 10 章 高松のどこが出てくるか】

高松でのカフカ少年の足跡については、高橋龍夫氏の論考に負うところが大きかったのだが、私独自の推定もいくつか提示した。たとえば、星野青年が駅近くの映画館に行くけれど、JR 高松駅付近にそのような映画館は存在しないこと、また、佐伯さんは地元の音楽大学を中退するが、香川に音楽系の大学はないこと（なお、徳島文理大学に音楽学部のピアノコースがあり、そこへ佐伯さんは通学した可能性がある。ただし、音楽専攻科が設置されたのは 1975 年なので時期がややずれてしまう）、高松市内には県立と市立の体育館があり、どちらもトレーニング施設があって、カフカ少年が行った体育館はどちらもとも言えないこと、等である。

【補足】

最近、驚いたことは、村上が『村上 RADIO』(2025 年 7 月 27 日放送)の中で、「実を言いますと、僕は『万延元年のフットボール』、まだ読み通したことないんです」と述べたことである。村上の『1973 年のピンボール』は大江小説のタイトルを拝借したもので、まさかの発言であった。『万延元年のフットボール』にはギーという徴兵を逃れて山に隠れている人物が出てくる。また、山奥の小さな町が舞台になっていることなどで、『海辺のカフカ』に強い影響を与えた作品であると考えていたので、そのショックは大きかった。この村上発言は、拙著の出版直後のことで、どうすることもできないが、今も私を動揺させている。

【落合貞夫（沖縄文学、オーガスト・ウイルソン、村上春樹）】